

側面であり、他は臨床的（相対的、自己的、総合的、感覺的）側面である。現代に至る小児医学も、この差違の中で葛藤しつつ、人間学としての道を摸索中であるといえる。

いづれにしても、死の恐怖と不断に直面し虚弱なわが子が健やかに育ってほしい親の素材であるが切実な願望が、スワドリングを必要とさせ、存続させたといえよう。現代小児医学においてスワドリングが再評価され、特に小児看護医学でスワドリングによる運動の抑制が乳幼児の鎮静化に効果的であることが報告されているのもその故である。

（東京学芸大学附属大泉小学校）

腹腔動脈の解剖学的研究の

歴史（一）

— ハラーを中心に —

澤野 啓 一

腹腔動脈は決して微小な構造物ではないが、腹腔内臓の裏側（背側）に存在し、かつ腹腔の背壁に埋没した短い物であるため、解剖学的探索が難しく、その重要性にもかかわらず、近代解剖学の創始者ヴェサリウスによっても発見されることはなかった。

Michels（一九五五）によれば、腹腔動脈の最初の発見（記載）は Haller（一七五六）の“*Icones Anatomicae*（以下略）”（以下『ハラー一七五六乙』と略記する）である。

ハラーは、他の引用者によってしばしば『人体解剖図譜』もしくは『*Icones Anatomicae*』と略称されている解剖学書全八巻を、一七四三年から一七五六年にかけて刊行している。Michelsの引用した書名には、後に述べるような理

由で、多少疑問があるが、ハラーの動脈系解剖学の到達点という意味では、おそらく第八卷（以下『ハラー一七五六甲』と略記する）と同じ水準の著作と思われる。

当時は、解剖学と生理学とが現在のように分離していたわけではないが、ハラーの解剖学分野での関心は、特に動脈系に対して強かったようで、『人体解剖学図譜』シリーズの刊行の時期に重ねて、動脈系にかなり重点を置いた別の著作も刊行している。その中の一冊に、『解剖学研究選集』第三卷 (HALLER, GÖTTINGAE, VANDENHOECK, 1748) があるが、ハラーはその中で、腹腔動脈とその主要な枝について記載し、図も載せている（一一～二二頁、Tab. I）。

この図は、ハラーによれば A.F. Walther (一七二九) によるものとされており、Rio Branco (一九二二、七八六～七八八頁) も同じ Walther を引用している。しかしこの図では、左胃動脈は腹腔動脈から分枝して右に向かい、次いで Y 字型に分岐して、一方は副肝動脈となって肝臓へ向かい（この動脈をハラーは Arteria hepatica prima と呼んでいる）、他方は大動脈の裏側（背側）を右から左へ回

り込んで胃の小彎の噴門付近へ向かっている。左胃動脈が副肝動脈を分枝するのは間々あるケースであるが、大動脈の裏側（背側）を回り込んで胃に達するかのごとく描かれている点は、何とも不可能である。

この図では、肝臓を養う動脈は、先の A. hepatica prima (左副肝動脈) の外に、A. hepatica altera (固有肝動脈) として胃十二指腸動脈から鋭角的に逆行して肝臓へ向かう A. hepatica tertia なる副肝動脈、の以上三本の動脈が描かれている。

とにかく、このことから、ハラーが一七五六年より以前の二七四八年の段階で、腹腔動脈に関する記載をしていることが明らかとなった。

一方、Tandler (1904 b) は引用文献に、“Haller (1743): Icones anatomicae. Göttingen.” を掲げ、ハラーが、その第八卷 (Fasc. VIII.) 三五頁に、「ただ一回だけ腹腔腸間膜動脈を観察した」と述べているとしている [Tandler (1904 b) の四七八頁]。

後に述べるような理由で、Tandler が引用しているのが、ハラーの有名な『人体解剖学図譜』 (Icones anatomo-

micæ) シリーズの中の一冊であることは間違いないと思
われるが、刊行年については異なっている。

さて問題の第八巻の正式な表題は、"Iconum anatomi-
carum quibus aliquae partes corporis humani delineatae
traduntur. Fasciculus VIII. et ultimus. Arteriarum totius
corporis systema cum supplemento ad descriptiones vasorum.
Auctore ALBERTO V. HALLER. (中略) GOTTINGAE,
APUD VIDUAM B. ABRAMI VANDENHOECKII.
MDCCLVI." である。

Michels (一九五五) が十二頁で引用している『ハラー
一七五六乙』は、参照することができなかっただけではな
く、外にその存在を確認する資料も発見できなかったが、
多数の学術書を著作したハラーのことであるから、『ハラ
ー一七五六甲』と別の書物である可能性も十分ある。一七
五六年は『人体解剖学図譜』全八巻完結の年であり、翌
一七五七年からは大著作『人体生理学原論(要綱)』(Ele-
menta physiologiae corporis humani, 1757~1766) の刊行
が始まっている。つまり、ハラーの狭義の脈管解剖学はこ
の時点で一応完結したと見てよいであろう。したがって、

Michels (一九五五) が引用する『ハラー一七五六乙』が
『人体解剖学図譜』の動脈系を中心とした要約本であると
しても、ハラーの人体解剖学の到達点という意味では、同
じ内容と考えて差し支えないであろう。

『ハラー一七五六甲』は、人体で腹腔動脈系の変異型に
ついても発見し記載している。その主なものを挙げれば、
次のようである。(なお、①~⑤の記号は、読みやすくす
るために筆者が付けたもので、『ハラー一七五六甲』自身
の記号や記載順とは別である。)

① 腹腔動脈が三分岐せずに、まず脾動脈と左胃動脈と共
通幹(胃脾動脈幹)と総肝動脈とに二分岐し、次いで胃
脾動脈幹が脾動脈と左胃動脈とに分岐する形式。

② 左胃動脈が腹大動脈から直接分枝する形式。

③ 左胃動脈から肝臓へ向かう太い枝(左副肝動脈)が存
在する形式。

④ 腹大動脈からは胃脾動脈幹と肝腸間膜動脈幹とが分枝
し、胃脾動脈幹は左胃動脈と脾動脈とに分岐し、肝腸間
膜動脈幹は総肝動脈と上腸間膜動脈とに分岐する形式。

⑤ 腹腔動脈と上腸間膜動脈とが共通幹(すなわち腹腔腸

間膜動脈)をなして腹大動脈より分枝し、後に両動脈に分岐する形式。

Michals (一九五五)は、ハラー自身は腹腔動脈の最初の発見者を Lowernus であると述べているとして、その箇所だけ六行分をハラーのラテン語原文を引用しているが、引用文献には載せておらず、小生の拙い検索の結果では、Lowernus の著作を、引用を含めて、他に見いだすことは出来なかった。

(東邦大学医学部・第一解剖)

かわりだねの 科学者たち

●板倉聖宣著 [各紙絶賛!] 定価3200円
近代日本の科学と教育を本当にきずいた10人の魅力ある科学者と教師、その仕事と生涯を紹介。渡辺敏/井上円了/藤森良蔵、他

増補版 模倣と創造

科学・教育における研究の作法

●板倉聖宣著 四六判264頁 定価1400円

「模倣より創造の方が当然いいものだ」という常識。その常識が創造性をそこない。盗作を日常的なものとする。豊富な事例をもとに、創造への確かな道筋を示す。内容●なぜ著作権侵害を問題にするか/模倣と創造の矛盾論/創造性の心理学/科学読み物の翻訳にみる模倣と創造

仮説社 〒101 東京都千代田区西神田2-7-8
☎03-234-1779 郵便振替東京5-187851



模倣の時代

●板倉聖宣著全二巻 定価(上)二八〇〇円(下)三二〇〇円

幕末まで、脚気は江戸および上流階級の病気であったが、維新以後は大量発生し、とくに軍隊での発病・死亡が深刻な問題となった。しかし脚気は東洋特有の病気である。世は西欧模倣万能の時代であったが、これはかりは日本人が自ら創造性を発揮して解決しなければならなかった。その時にあつて創造性を発揮したのは誰か。森鷗外らの優等生軍人・学者は何をしたか。日本近代史の書き換えを迫る科学史の大口マン、いま、創造の時代に向けて放つ。 四六判上製 全千頁